

研究報告

東京医療保健大学医療保健学部看護学科卒業生の動向調査
第2報 —卒業生が職務遂行をする中でキャリアを育む経験と求める支援—

A Trend Survey of Graduates from Tokyo Healthcare University Division of Nursing (The 2nd report) : Experience of Affected to Carrier Development and The Supporting Requirements while Their Working Life.

川原理香 伊藤美千代 岡田弘美 蓮井貴子 平田美和 藤井美穂子 小澤知子

Rika KAWAHARA, Michiyo ITO, Hiromi OKADA, Takako HASUI, Miwa HIRATA, Mihoko FUJII, Tomoko OZAWA



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈研究報告〉

東京医療保健大学医療保健学部看護学科卒業生の動向調査 第2報 —卒業生が職務遂行をする中でキャリアを育む経験と求める支援—

A Trend Survey of Graduates from Tokyo Healthcare University Division of Nursing(The 2nd report):
Experience of Affected to Carrier Development and The Supporting Requirements while Their Working Life.

川原理香 伊藤美千代 岡田弘美 蓮井貴子 平田美和 藤井美穂子 小澤知子

東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

Rika KAWAHARA, Michiyo ITO, Hiromi OKADA, Takako HASUI, Miwa HIRATA, Mihoko FUJII, Tomoko OZAWA

Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

要 旨：東京医療保健大学医療保健学部看護学科卒業生が職務遂行をする中でキャリアを育む経験を明らかにすることを目的に、便宜的サンプリング法により選定した16名を対象に、半構造的インタビューを行った。対象は卒業後、【日々の自分の業務で精一杯】の段階から、【未熟さに気づき他者から学（ぶ）】び、【成長と責任を実感する】ことで、看護職としての自立を目指していた。また、【チームの一員として考え動く】ことを意識するとともに、看護職としての自立を基盤に、【看護職としてどのように貢献／活躍したかを考え始め（る）】たり、【不安をもちながらこの先の道を模索する】【自分の人生における看護職を位置づけ、新たな一步を踏み出す】へと、キャリアデザインを描いていた。このことから、卒業生の役割に応じたキャリア支援の必要性和卒業生自身が自分のキャリアを振り返り、キャリアを創る力を得られるように仕組みを創り上げていくことが今後の課題であると考えた。

キーワード：看護系大学 卒業生 動向調査 キャリア 経験

Keywords：University of Nursing, Graduate, Trend survey, Career, Experience

1. はじめに

保健・医療・福祉サービスの質向上に伴い、サービス内容や方法は高度化、複雑化し、提供の場も多様化している。保健・医療・福祉サービスを提供する看護職も専門性を活かしながら役割を拡大させ、多職種と連携することにより質の高い看護を提供することが期待されている。その期待に応えるためには、看護職自身のキャリア発達が前提にあるが、ありがたい自分や培ってきた価値観と現実とのギャップに揺れるなど自身のキャリアについて悩む現状が報告されている¹⁾。東京医療保健大学医療保健学部看護学科（以下、本学科）では、「チーム医療」のキーパーソンとなる臨床に強い看護職を目指し、教育の充実を図っている。その教育を受けた卒業生が卒業後どのように自己のキャ

リアを育んできたのかを明らかにしたことはない。

これまでの看護基礎教育課程の卒業生を対象とした動向調査では、就職先の規模、職種、働き方、役職、専門看護師認定など、卒業後の就業／労働状況や新人看護職の実践と研究に対する学術的支援および対人関係や同窓生交流に対する社会的支援が求められていることが明らかにされている^{2)~8)}。本学科卒業生がどのようにキャリアを育み、どのような支援を求めているかを明らかにすることは、卒業後に現実とのギャップに揺れ、キャリアの方向性に悩む看護職への支援に資するとともに、本学科における看護職の成長・発達を支援するための環境を創り上げることに寄与すると考える。

2. 研究目的

本学科卒業生が職務遂行をする中でキャリアを育む経験と、求める支援を明らかにする。

3. 用語定義

先行文献⁹⁾を参考にして、以下のように操作的に定義をする。

- 1) キャリアデザイン：将来、自分が在りたい姿を明確にし、そこにたどり着くための課題を認識した上で、自分が進む職業生活（キャリア）の道のりを描く一連のプロセス。
- 2) キャリア：人生全体を基盤とする職業生活における経験。

4. 研究方法

1) 対象者のサンプリング

本学科卒業生の育ちを概観するために、卒業後の看護職経験年数や職種に偏りがないように、卒業期を3群（卒後6－8年、卒後3－5年、卒後1－2年）に分け、各群から看護師・保健師・助産師を含むように5から6名、合計16名を選定した。就業経験を語ってもらうこと、就業中であること、調査依頼等の連絡がとれることを条件に便宜的サンプリング法を用いた。

2) データ収集方法

インタビューは2016年9月から11月で実施した。インタビューガイドに基づく半構造的インタビューで、対象者が指定する場所または東京医療保健大学内の個室で、60分程度実施し、対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。

3) インタビュー内容

インタビュー内容は以下の通りである。

- (1) 卒業期、看護職経験年数、現在の職種、現在の職場、職場異動／転職経験の有無、進学経験の有無
- (2) どのような経験や出来事をきっかけに、卒業後から現在までキャリアデザインを描いてきたか
- (3) 自ら描いたキャリアを実現するためにどのような支援を求めているか

4) 分析方法

対象者の同意を得た上で録音したデータから逐語録を作成した。逐語録から、「職務遂行の中で、キャリアへの考えや行動が揺れたり変化した経験」と「自ら

描いたキャリアを実現するために求める支援」について抽出した。対象者の様々な経験の中で、キャリアデザインを変更するだけでなく変更しないことも考えられること。その選択の過程で様々な影響要因がある可能性を考慮し、「キャリアへの考えや行動が変化した経験」だけでなく「キャリアへの考えや行動が揺れた経験」も抽出した。「キャリアへの考えや行動が揺れた経験」とは、キャリアデザインを変化させるまでには至らないが、キャリアデザインを描く上で考え方や行動に影響を与えた経験で、対象者にはこれまでの職場での看護実践や役割、キャリアを形成する上での困難から、それらの経験からなぜ影響を受けたと考えるのか、その経験をどのように自身の中でとらえているのか（意味づけしたか）を訊ねてデータを得た。分析は、共同研究者間で検討し、妥当性の確保に努めた。

(1) 「職務遂行の中で、キャリアへの考えや行動が揺れたり変化した経験」の分析

抽出したデータの意味内容が損なわれないように要約し、コードとした。意味が類似するコードをグループにまとめ、その特徴を表す名前をつけ、サブカテゴリーとした。次に、意味の類似するサブカテゴリーをカテゴリーへとまとめ、包括する上位の概念をコアカテゴリーとした。

(2) 「自ら描いたキャリアを実現するために求める支援」の分析

抽出したデータの意味内容が損なわれないように要約し、コードとした。意味が類似するコードをグループにまとめ、その特徴を表す名前をつけ、カテゴリーとした。

5. 倫理的配慮

対象者へは、書面および口頭にて、研究の趣旨、目的、方法、本研究への参加は自由意思であり、不参加による不利益を被ることはないこと、同意はいつでも撤回でき、その場合も不利益を被ることはないこと、個人情報保護されることについて説明し、同意への署名を得た上で実施した。本研究は研究者が所属する機関のヒトに関する研究倫理委員会の承認を得て実施した（教28－14）。

6. 結果

1) 研究対象者の背景

対象者の卒業期は、卒後6－8年群5名（看護職経

表1 対象者の背景

		卒業期 (期生)	看護職経験 年数 (年目)	現在の職種	現在の職場	職場異動/転 職経験	進学 経験
卒 後 6 8 年 群	A	1	8	看護師	外科・形成外科病棟	有	無
	B	2	7	教員	4年制看護大学	有	有
	C	2	5	助産師	産科病棟	無	有
	D	3	6	看護師	小児科病棟	無	無
	E	3	6	保健師	保健所	有	無
卒 後 3 5 年 群	F	5	4	看護師	集中治療室	無	無
	G	5	4	看護師	精神科病棟	無	無
	H	6	2	助産師	産科・婦人科病棟	無	有
	I	6	3	看護師	集中治療室	無	無
	J	6	3	看護師	心臓外科病棟	無	無
卒 後 1 2 年 群	K	6	3	保健師	保健センター	有	無
	L	7	2	看護師	冠疾患集中治療室	無	無
	M	7	2	看護師	新生児集中治療室	無	無
	N	8	1	看護師	救命・外傷センター	無	無
	O	8	1	看護師	整形外科病棟	無	無
	P	8	1	保健師	保健センター	無	無

験年数平均6.4年)、卒後3～5年群6名(平均3.2年)、卒後1～2年群5名(平均1.4年)。性別は男性3名、女性13名。職種は看護職11名、保健師3名、助産師2名であった。異動または転職で職場を変更した経験のある者は4名で、卒業後大学院等の進学経験がある者は3名であった。面接時間は1名につき平均46分(21分～72分)であった(表1)。

2) 職務遂行の中で、キャリアへの考えや行動が揺れたり変化した経験

インタビューから本学科卒業生のキャリアへの考えや行動が揺れたり変化した経験は、218のコードが抽出され、それらは31のサブカテゴリーから、【日々の自分の業務で精一杯】、【未熟さに気づき他者から学ぶ】、【成長と責任を実感する】、【チームの一員として考え動く】、【看護職としてどのように貢献/活躍したいかを考え始める】、【不安をもちながらこの先の道を模索する】、【自分の人生における看護職を位置づけ、新たな一步を踏み出す】の7カテゴリーに集約され、さらに「医療チームの一員として看護を担う」、「看護職として次のライフステージを創造する」の2コアカテゴリーが抽出された。また、看護職経験年数によるキャリアを育む経験の明確な特徴は示されなかった。

以下、コアカテゴリーを「」、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを『 』、コードを〈 〉と表記する(表2)。

(1) 「医療チームの一員として看護を担う」

「医療チームの一員として看護を担う」は、4カテゴリーで構成された。

余裕の無い精一杯の状態での自分に向けられていた視点を、職場の先輩や後輩、学生にも広げ、視野の広がりを見せながら経験を重ねていた。また、未熟な自身の看護に直面しながらも、視野が広がることで、他者から学ぶなど、看護の質を迫り、医療チームの一員として、看護専門職としての自立を担う段階であった。

① 【日々の自分の業務で精一杯】

〈周囲の状況を見る余裕はなく、業務を確実に行うことが最優先である〉のように『自分の業務で精一杯』の中で、〈学び続ける自分ではなくて、勉強に追われている自分という感じが強くある〉など『日々勉強に追われる』と感じながら目の前の業務に真摯に取り組んでいた。また、〈病棟全体でサポートを受けながら、重症患者を受け持たせてもらっている〉のように『周囲に頼りながら実践する』とともに〈患者の希望と身体機能や生活環境のずれが生じることなどに葛藤があった〉など『未熟な看護がもどかしい』という思いを抱えていた。

②【未熟さに気づき、他者から学ぶ】

〈プライマリナーズとして関わる中で、身体面だけの支援では不足することを実感した〉など『自分の足りなさに気付く』ことで日々の看護実

践から課題を見出すことや〈リーダーの役割を果たすためにこれから必要だと考える院内研修を受講している〉などの与えられた役割実践から『実践から近い将来に向けて取り組む』こと、〈自施

表2 職務遂行の中で、キャリアへの考えや行動が揺れたり変化した経験

コア カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
医療 チームの 一員として 看護を担う	日々の自分の 業務で精一杯	自分の業務で精一杯	周囲の状況を見る余裕はなく、業務を確実に行うことが最優先である 最初はやることがわかってないので、自分のことに必死だったと思う
		日々勉強に追われる	機械から初めて呼吸・循環、それから患者の疾患を勉強したので、イメージと違った 学び続ける自分ではなくて、勉強に追われている自分という感じが強くある
		周囲に頼りながら実践する	1年目は自分のことで精一杯だし、先輩も自分のことを優先するように教えてくれた 病棟全体でサポートを受けながら、重症患者を受け持たせてもらっている
		未熟な看護がもどかしい	患者の希望と身体機能や生活環境のずれが生じることなどに葛藤があった 理想と現実の違いに悩む時もあった
	未熟さに気づき他者から学ぶ	自分の足りなさに気付く	プライマリナーズとして関わる中で、身体面だけの支援では不足することを実感した 先輩に伝わらなかったもので、相手に合わせて話す力が自分に足りないと思った
		実践から近い将来に向けて取り組む	リーダーの役割を果たすためにこれから必要だと考える院内研修を受講している より実践に向けた急変対応の思考回路を確立するために急変係を希望した
		視野を広げて学ぶ	自施設以外のやり方や他者の経験を聞き、広い視野を持つことの大切だと思う 自分の業務には直接関係がない研修会や研究発表会に参加した
		先輩・後輩・学生から学ぶ	抑制に対して違和感を覚える学生をみて、自分のケアについて改めて考えた 急変対応のイメージトレーニングをしている先輩の話から、自分も取り組む必要があると思った
		自分流の学び方に気づく	自分の学び方と先輩の学ぶ姿勢にギャップを感じる 自分は学生時から疑問を持って学習を進めてきたので、疑問を持たずに働く先輩は先がないと思う
		意識的にモチベーションを維持する	難しいけれど、自分が楽しいと思うところを考えてモチベーションを維持している 友達と話すことや先輩の思いを聞くことでモチベーションにつなげる
		時間・余力がない	外部の勉強会に興味を持っていても、行く余裕はなかった 様々なことは吸収できるが、忙しく、自分がめざす姿が見えなくなる
	成長と責任を実感する	実践から大学での学びを意味づける	在学中には思いを入れていなかった学習が今の実践に役立っている 様々な人とのかかわりで、在学中はわからなかったグループワークの意味を感じた
		成長を実感する	自分の中で、看護職として成長していると思う 見え方や自分の幅が広がり、部署異動は活動の幅の広さを改めて実感できる良い経験になっている
		やりがいを感じる	後輩育成や委員会の仕事にやりがいを感じている 好きなことをやってそれを業務として扱ってもらえることに価値を見出している
		周囲から認められる	病棟の中で自分が信頼ようになってきて役割をもらえるのは嬉しく思う 自分が作成した資料が好評価を得られると良かったと思う
		責任に不安/恐れを感じる	自分の指導で患者の安全が守れなかったり、先輩に辛い思いをさせるのではないかと 思うと怖い リーダーとして、患者の把握や処置の確認、役割分担・配置にも責任が大きくなる
		チームの一員として考え動く	チームで行うという視点を刷り込まれているため、チームでの動きを無意識に考えていた 所属組織が変わる中で、協力し合うには自分がどのように動いたら良いかを考えている 協働実践と思いながらソーシャルワーカーなどに電話している 医師とどうやって協働するかを大事に思っている
看護職として次の ライフステージを 創造する	看護職としてどのように貢献/活躍したいかを考え始める	チーム医療を実践する中でわかるのとやれるのは違うところがある	チーム医療を実践する中でわかるのとやれるのは違うところがある 他職種に活動の成果を上手く伝えられないので、思うように協力し合っていない
		モデルから将来を創造する	専門看護師などを取得しても元の配属に戻れていない先輩をみて、進学はしなくても良い と思った 先輩のキャリアや担当による違いは面白いと思うし、私もそうなりたいと思うこともある
		これから進む道を考える	臨床で未達成な部分があるので、これからどうしたいのかわからない リーダー業務や全身状態をみる力をつけたいと思うが、スペシャリストになりたいかはわからない
		現職場を超えて活動の場を考える	助産師という資格を生かして自分の活躍の場を広げられると実感した 大学教員の道を提示されて、そういう道もあるのだと発見になった
	不安をもちながらこの先の道を模索する	ケアの質向上を目指す	もう少し根拠をもってデータや患者の状態をアセスメント・評価できれば良いと思う 一通りの業務だけではなく、個性のケアをできるようにになりたいと思うようになった
		希望と現実の悩む	認定を目指す者が多いため何年も待つこともあるし、認定になっても希望の部署に配属 されるとは限らない 職場環境として役割や経験年数的に異動はあまり好まれないため、希望が通らない
		周囲からの期待を受け入れられない	周囲から小児以外にも関わったほうが良いと助言されても受け入れられない部分があった 上司には師長に言われていると言われたが、今は全く考えられない
		相談ができない	プリセプターが退職してからキャリアについて相談できる相手がいない 置かれた状況が異なるため職場でも友人にも相談できない
		周囲に後押しされる	後輩指導は難しいので、先輩に相談しながらアプローチするようにしている 小児に特化しても良いと思うと応援してくれる先輩もいて嬉しかった
		次のステップ実現への不安	違う臨床の現場に出ると自分の技術や知識がどの程度役立つのか心配 認定看護師の業務量をみていると自分には難しいと思う 年齢的な節目であり、これからの道を自分に問いかけているし、覚悟を決めなくては いけないと思う
	自分の人生における看護職を位置づけ、新たな一歩を踏み出す	生き方を考える	自分なりのライフプランはあるが、退職よりも継続して働くことが良いと思っている リーダーをすることで先輩を引き上げられる看護師になりたいと思うようになった
		役割実践の中から将来像を見出す	進学よりも目の前における役割をしっかりとこなすことが大事だと思う 夜勤が難しいことや高齢者の生活に近い場所での看護に興味があり、転職した 自分がやりたいと思うことができる職場を見つけたので転職することにした
		将来像に合った場に身を置く	

設以外のやり方や他者の経験を聞き、広い視野を持つことを大切だと思う」など『視野を広げて学ぶ』こと、〈抑制に対して違和感を覚える学生をみて、自分のケアについて改めて考えた〉など『先輩・後輩・学生から学ぶ』こと、このような他者とのかわりの中で、〈自分の学び方と後輩の学ぶ姿勢にギャップを感じる〉など『自分流の学び方に気づく』ことから学びを深めていた。これらの行動は、〈難しいけれど、自分が楽しいと思うところを考えてモチベーションを維持している〉などの『意識的にモチベーションを維持する』ことに支えられるとともに、〈様々なことは吸収できるが、忙しく、自分がめざす姿が見えなくなる〉など『時間・余力がない』状況による学び続けることの難しさもあった。

③【成長と責任を実感する】

学生時の学びを基盤に臨床現場での経験を重ねることで、〈在学中には思いを入れていなかった学習が今の実践に役立っている〉など『実践から大学での学びを意味づける』とともに、〈見え方や自分の幅が広がり、部署異動は活動の幅の広さを改めて実感できる良い経験になっている〉など『成長を実感（する）』していた。

職場での役割を付与されることで〈後輩育成や委員会の仕事にやりがいを感じている〉など『やりがいを感じる』ことや〈病棟の中で自分が信頼されるようになってきて役割をもらえるのは嬉しく思う〉など『周囲から認められる』という認識につながる反面、リーダーとして、患者の把握や処置の確認、役割分担・配置にも責任が大きくなる〉など『責任に不安／恐れを感じ（る）』ていた。

④【チームの一員として考え動く】

〈チームで行うという視点を刷り込まれているため、チームでの動きを無意識に考えていた〉のように『チームにおける看護を考える』ことで、〈協働実践と思いながらソーシャルワーカーなどに電話している〉と『チームを意識して動く』ことが意識されていた。一方、〈チーム医療を実践する中でわかるのとやれるのは違うところがある〉など『思うように協力し合えない』という実践の難しさにも直面していた。

(2) {看護職として次のライフステージを創造する}

{看護職としての次のライフステージを創造する}

は、3カテゴリから構成された。

看護職としての自立を基盤に、他者や社会へと視野を広げ、看護の質を追及しながら、さらに次のステージへとキャリアデザインを描いていた。

①【看護職としてどのように貢献／活躍したいかを考え始める】

様々な出会いや経験を重ねることで、〈先輩のキャリアや担当による違いは面白いと思うし、私もそうなりたいと思うこともある〉など『モデルから将来を創造（する）』したり、〈臨床で未達成な部分があるので、これからどうしたいのかわからない〉など、『これからの進む道を考え（る）』ていた。先のことは、〈大学教員の道を提示されて、そういう道もあるのだと発見になった〉など『現職場を超えて活躍の場を考える』という視野の広がり、〈一通りの業務だけではなく、個別性のケアをできるようになりたいと思うようになった〉など『ケアの質向上を目指す』のように看護の質を追求する方向性がみられた。

②【不安をもちながらこの先の道を模索する】

自分の進む道を考え始めることに伴い現実可能性を考える上で、〈認定を目指す者が多く、何年も待つこともあるし、認定になっても希望の部署に配属されるとは限らない〉など『希望と現実に悩む』ことや〈周囲から小児以外にも関わったほうが良いと助言されても受け入れきれない部分があった〉など『周囲からの期待を受け入れきれない』と葛藤する姿があった。さらに、〈置かれた状況が異なるため職場でも友人にも相談できない〉など『相談ができない』状況がある一方で、〈小児に特化しても良いと思うと応援してくれる先輩もいて嬉しかった〉など『周囲に後押しされる』こともあり、周囲のサポート状況の違いによる影響を受けていた。また、〈違う臨床の現場に出ると自分の技術や知識がどの程度役立つのか心配〉など自分の力量や自分が置かれている環境を鑑み『次のステップ実現への不安』を抱えていた。

③【自分の人生における看護職を位置づけ、新たな一歩を踏み出す】

性別を問わず、〈年齢的な節目であり、これからの道を自分自身に問いかけているし、覚悟を決めなくてはいけないと思う〉など、『生き方を考える』ことや〈進学よりも目の前にある役割をしっかりこなすことが大事だと思う〉など『役割実践

表3 自ら描いたキャリアを実現するために求める支援

カテゴリー	コード
同年代、同職者との 情報交換による新しい風	それぞれが様々な経験をしているので、同世代や教員を交えて話をし、普段とは違う刺激が得られる場が欲しい
	病院から他の所で働き始めた方の話など、これからのことについて研修や講和などの形で聞ける機会があれば今後の参考になる
	同じぐらいのキャリアを重ねている保健師が交流したり情報交換したりできる機会があると振り返りの機会になるし、頑張ろうと思える
	看護師たちと介護など、テーマを定めて意見交換・情報交換できる場があると良い 保健師同士の交流の場が少ないので、交流する機会があると良い
キャリアデザインへの理解 とアドバイス	広い視野でこれからのこと、働き方などについて相談に乗ってほしい
	先輩や教員からのアドバイスはモチベーションにつながるため、アドバイスをくれる人が欲しい
	語学留学も、より良い看護を目指しているの、看護職としての成長のために行くものだとして理解してほしい
能力・スキル向上に向けた 学習の機会	臨床に出て、少し経験をしてから臨床推論の研修を受けるのは効果的だと思う
	臨床経験をふまえて、自分のリーダー像について、学生の時のように基本やグループワークを行う方が効果的ではないかと思う
	初心に戻って、シャドウイングをして他者から学ぶ機会があると良い
	大学の講義をもう一度受講したい
役割の付与	早い段階からリーダーをやらせてもらうことで、責任者として働くことや責任者として判断することなどを学べたので、支援という形ではないが良い経験だった
保健師の働き方の 具体的イメージ化	基礎教育の段階で、保健センターなどに行く機会を設けてイメージをつけて欲しい
	就職先を選ぶときに、各自治体の保健師は何をやっているかを検索してもわからなかったの、どの保健師を目指すのか相談できると良い

の中から将来像を見出す』のように、看護職としての未来を考えるのではなく、キャリアを含めた自分の人生として考えていた。そして、〈自分がやりたいと思うことができる職場を見つけたので転職することにした〉など『将来像に合った場に身を置く』決断をして、看護職としての人生を進展させながら歩み続けることを意思決定していた。

3) 自ら描いたキャリアを実現するために求める支援

対象者のインタビュー内容から15のコードが抽出され、さらに【同年代、同職者との情報交換による新しい風】、【キャリアデザインへの理解とアドバイス】、【学ぶ機会】、【役割の付与】、【保健師の働き方の具体的イメージ化】の5カテゴリーに集約された。以下、カテゴリーを【 】、コードを〈 〉と表記する(表3)。

(1) 【同年代、同職者との情報交換による新しい風】

〈それぞれが様々な経験をしているので、同世代や教員を交えて話をし、普段とは違う刺激が得られる場が欲しい〉〈同じぐらいのキャリアを重ねている保健師が交流したり情報交換したりできる機会があると振り返りの機会になるし、頑張ろうと思える〉など、情報交換をすることで新しい気づきや学びを得る支援を求めている。

(2) 【キャリアデザインへの理解とアドバイス】

〈広い視野でこれからのこと、働き方などについて相談に乗ってほしい〉など、これからのキャリアを考えていく上で、個々人に合わせた支援を求めている。

(3) 【能力・スキル向上に向けた学習の機会】【役割の付与】

〈臨床経験をふまえて、自分のリーダー像について、学生の時のように基本やグループワークを行う方が効果的ではないかと思う〉〈早い段階からリーダーをやらせてもらうことで、責任者として働くことや責任者として判断することなどを学べたので、支援という形ではないが良い経験だった〉など、職場での役割や看護実践向上に向けた支援を求めている。

(4) 【保健師の働き方の具体的イメージ化】

〈基礎教育の段階で、保健センターなどに行く機会を設けてイメージをつけて欲しい〉など、限られた時間の中でも基礎教育課程における具体的なキャリアイメージ構築支援を求めている。

7. 考察

1) 本学科卒業生が職務遂行をする中でキャリアを育んだ経験

(1) 医療チームの一員として看護を担う経験

対象者は卒業後、実習や机上の看護展開ではうまくできたこともできず、知識不足や技術の不熟さに直面することで、自分の力不足を感じていた。これは【日々の自分の業務で精一杯】と目の前のことと自分のことにだけ注目する段階であり、先行研究¹⁰⁾の、新卒看護職が学習に迫られている状況と同様であった。その段階から経験を重ねることで、自分の課題が明確化されるとともに、先輩や後輩などの姿を通して【未熟さに気づき他者から学(ぶ)】び、職場で役割を担うことなどから【成長と責任を実感(する)】し、看護職としての自立を目指していた。新卒看護職は、先輩看護師や患者からの評価や患者への意識の変化から「できる」という実感をもつと言われている¹¹⁾。看護職として日々経験していることを、失敗体験としてとらえるのではなく、周囲に力を借りながら振り返り、学びを深めた経験としてとらえていくことが、自ら学び続ける姿勢を継続させるきっかけになると考える。

また、学生の時からの学びを生かしながら、現実を目の当たりにする中で、【チームの一員として考え動く】ことを意識していた。医師、薬剤師、栄養士、メディカルソーシャルワーカーなど職務遂行上関わる人たちをチームと捉え、〈チーム医療を実践する中でわかるのとやれるのは違うところがある〉など実践の難しさを感じながらも、チームにおいて看護職の役割を担い、貢献できるようになるまでの経験が、看護職としての基盤となっていると考える。

(2) 看護職として次のライフステージを創造する経験

医療チーム内での看護職としての自立を基盤にし、看護職の多様な活動／貢献の可能性を見出すとともに、看護の質向上を目指し、【看護職としてどのように貢献／活躍したいかを考え始め(る)】ていた。さらに、自分の思いと周囲の意見の違いや置かれている環境の中で悩むことや、『周囲に後押しされる』中で【不安を持ちながらこの先の道を模索する】ことを重ねながらも、どこかで覚悟を決めて【自分の人生における看護職を位置づけ、新たな一步を踏み出す】ことへと進んでいた。本調査の中では、各施設で示しているキャリアパスを参考にしたり、影響を受けたという結果は得られなかったが、看護師

の職業継続意志を支援するには、看護に対するやりがいや仕事に対する誇りが実感できるような職場環境の整備、看護部門の方針の明確化、上司との信頼関係の構築、ワークライフバランスへの支援などの必要性が示唆されている¹²⁾ことから、少なからず影響を受けている可能性はある。自分自身の考えや経験、他者からの意見や期待、そして置かれている環境の影響を受けながら、看護職として自立をするとともに、自分から他者、社会へと視野が広がることで、責任を背負って自分の人生を切り開き始めていることが推察された。

(3) 「視野の広がり」と「看護の質の追求」を軸にキャリアが発展していく経験

【日々の自分の業務で精一杯】だった経験から、『自分の足りなさに気付(く)』き、職場の先輩や同僚など医療スタッフの一員としての意識をもち、『周囲から求められる』ようになり、自分のことしか見えない状況から医療チームを見据え、その一員として自分を位置付ける視野の広がりがあった。これは、看護師のキャリア発達過程(全Ⅵ期)のⅠ期：基本的知識・技術に獲得、Ⅱ期：チームにおける指導力の獲得、Ⅲ期：専門・関心領域の模索へと見る世界が自分から職場のチーム、さらにそれを越えて専門・関心領域へと拡大すると同様であり、見える世界の拡大が経験を積むことに繋がっていると考える¹³⁾。

(4) 医療チームの一員として看護を担うことから、看護職として次のライフステージを創造する経験へと移行する経験

本研究では、医療チームの一員として看護を担うことから、看護職として次のライフステージを創造する経験へと移行していく経験は抽出されなかった。しかし、【チームの一員として考え動く】や【看護職としてどのように貢献／活躍したいかを考え始める】のように、看護職としての役割を担い、看護職として役割を果たすことで、看護の質向上に向かっていると考える。仕事の達成感のなさからキャリアの停滞を経験した看護職は、きっかけを模索・活用し、目標を見出すことで停滞から抜け出して前に踏み出そうとしていた¹⁵⁾という先行研究から、看護職として目指す姿を見出すことができる何らかの経験を得ていたのではないかと推察される。

2) 本学科卒業生がキャリアを育む上で求める支援と課題

求める支援は、【同年代、同職者との情報交換による

新しい風】に代表される意欲の向上を支える支援と能力やスキルの向上を支える【能力・スキル向上に向けた学習の機会】【役割の付与】、さらに【キャリアデザインへの理解とアドバイス】があった。これは、入職直後や日々の業務や職場での新たな役割を担うなど、目の前に課題が山積している状況でキャリアが生活の大半を占めていたものが、視野が広がり、人生全体の中でキャリアを考えるようになることで、組織の中の自分ではなく、個々人に合わせた支援を求めるようになってきたのではないかと推察する。

本調査では、就業継続している16名全員が前向きにキャリアを育んできていた。しかし、卒業生の中には、家庭と仕事の両立などに悩み、立ち止まっている人もいる可能性がある。卒業生自身が進む道を見出すには、自分を振り返り、自分と対話することが不可欠であるため、在学時から【保健師の働き方の具体的イメージ】を図るとともに、自分を俯瞰的に観る能力を育成していく必要がある。また迷い、悩むときには自分自身に問いを立てることが難しい時などに大学に支援を求めることができるように、仕組みを卒業生とともに創り上げていくことが今後の課題であると考ええる。

8. 研究の限界

本調査は、就業継続している本学科卒業生から便宜的サンプリング法を用いて対象者を選定しているため、卒業生の全体をとらえているとは言い切れない。卒業生には、看護職以外の職に就いていたり休職・退職していたりもするため、就業継続以外のキャリアを選択している卒業生への支援についても調査が必要である。

また、本研究は本学卒業生へのキャリア支援を創り上げていく基礎データとするため、本学卒業生が対象であり、最も職場経験が長いものでも8年であった。そのため、看護経験数によるキャリアを育む経験の特徴を見出すことはできなかったと考える。今後も定期的な調査が必要である。

9. 結論

1) 職務遂行の中で、キャリアへの考えや行動が揺れたり変化した経験

自分のことしか見えない状況から医療チームを見据え、看護専門職として期待される役割に応えるために、領域内外、または自身の所属組織外に視野を広げることによって職業経験を積むことにより、自身の人生におけるキャリアイメージを創っていた。

2) 自ら描くキャリアを実現するために卒業生が求める支援

本研究対象者は、所属する組織での成長だけでなく、個々の生活や人生に向けた支援を求めている。特に、看護の質を高め、活動を拡大していくための意欲を支える支援と能力やスキルを向上させる支援をも求めている。

謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、平成28年度東京医療保健大学学長裁量経費の助成を受けて実施したものである。

引用文献

- 1) 横山恵子, 長谷川真美, 兼宗美幸: 中堅看護師の抱える悩み—キャリア開発支援講座参加者の語りから. 第37回看護学会論文集, 看護管理 2006; 329-331.
- 2) 竹本由香里, 桑名佳代子, 原玲子 他. 看護系大学におけるキャリア開発支援に関する研究 卒業生の動向調査から. 北日本看護学会誌 2014; 16 (2): 23-31
- 3) 西浦郁絵, 中野智津子, 能川ケイ 他. 神戸市看護大学短期大学部卒業性の動向 (Ⅱ) 第1報卒業生の現状. 神戸市看護大学短期大学部紀要 2005; 24: 91-99
- 4) 藤原智恵子, 中野智津子, 能川ケイ 他. 神戸市看護大学短期大学部卒業性の動向 (Ⅱ) 第2報看護職としての成長. 神戸市看護大学短期大学部紀要 2005; 24: 101-118
- 5) 大井千鶴, 舟島なをみ, 亀岡智美. 看護基礎教育課程に在職する学生の就職先選択に関する研究 病院に1年以上就業を継続できた看護師を対象として. 看護教育研究 2009; 18 (1): 7-20
- 6) 伊藤美奈加, 大高恵美, 牟田能子 他. 日本赤十字秋田短期大学看護学科卒業生の動向調査 (第1報) 卒業生の就業・進学状況と卒後の資格取得の実態. 日本赤十字秋田短期大学紀要 2006; 11: 67-74
- 7) 宮下弘子, 片穂野邦子. 長崎大学看護学同窓会会員の進路に関する調査 第2報-専門看護師・認定看護師に関する意識調査-. 長崎大学医療技術短期大学部紀要 1999; 12: 61-63
- 8) 服部紀子, 諸田直実, 糸井和佳 他. 学士課程卒業後の新任看護職におけるキャリア発達に関する調査. 横浜看護学雑誌 2010; 3 (1): 45-49
- 9) 赤堀勝彦. キャリアデザインについて—キャリア形成を中心に—. 長崎県立大学論集 2006; 40 (1): 157-203

- 10) 服部紀子, 諸田直実, 糸井和佳 他. 学士課程卒業後の
新任看護職におけるキャリア発達に関する調査. 横浜
看護学雑誌 2010; 3 (1): 45-49
- 11) 大江 真人, 塚原 節子, 長山 豊 他. 新卒看護師が職
業継続意思を獲得するプロセス. 日本看護科学会誌
2014; 34: 217-225
- 12) 井上 美智子, 山田 覚. 看護師の職業継続意志に関する
研究: 職業継続意志に影響する要因の構造. 高知女子
大学看護学会誌 2015; 41 (1): 142-152
- 13) 水野暢子, 水上れつ. 臨床看護婦のキャリア発達過程
に関する研究. 日本看護管理学会誌 2000; 4 (1): 13-22